

木作品創作による地域貢献の可能性

－「聴き削り」による「きのこけし」での「縁」の起こし方を探る－

森と木のクリエイター科 木工専攻 橘 明広

1. 研究背景と目的

1 背景

2011年に東日本大震災が発生した後、東北の沿岸部をしばしば訪れた。被災地の自然の荒廃と劇的な変化を目の当たりにしながら、海岸の森に打ち捨てられた木々を生かし、地域の方々に何かできないか、追悼や鎮魂の想いを形にできないものかと考え、東北や四国を歩く中で、私は木工を志すようになった。地域の方々に話を聴きながら木作品を創作する『聴き削り』を通して、地域の方々に少しでも喜んでもらえるような関わり方を身につけたいと強く思うようになった。

2 目的

木作品創作を通して、地域の方々に喜ばれる縁の起こし方を探究し、「聴き削りの作法とノウハウ」として習得する。その作法等が地域貢献につながるかを検証する。

3 研究方法と手順

- ① 木作品を展示し、できるだけ多く方に手に取ってもらい、感想・意見をいただく。
 - ② それらを参考にした作品を地域に還元する取組を行い、検証する。
- ※ 具体的には、地域で行われるマルシェや、催しに参加し、来場者から感想等を聴き、次の実践へ繋げる。

(2つの課題)

工房等の端材を材料にしてこけしを製作し学内で感想を聞いたところ「意味が分からない」や、酷い場合は「気持ち悪い」という反応があった。①作品を手に取ってもらう、②こちらの製作意図を伝える、ためには、ただ作品を並べるだけでは難しく、自然に作品を手に取り会話に繋げるための仕組みが必要と強く感じた。

4 実践内容

【実践①' 24 ミノマチャマーケットでの展示】
2024年9月28～29日に開催された「ミノマチャマーケット」で、80体の1つ1つデザインや素材の異なるこけし



きのこけしとおみくじ

を制作して展示した。作品を手にとってもらい、会話を始めるきっかけになるよう、こけしに穴を開け、胴体の中におみくじを入れることにした。
(結果と考察)

2日間を通して80名余りの方々がブースを訪れ、こけしを手にとってもらい感想を聞くことができた。おみくじの効果は高く、こけしを手にとってもらった全ての方から感想を得ることができた。また、引かれたおみくじの偶然性が円滑なコミュニケーションを促すことが分かった。おみくじがお客さんの気を引き、木作品を手にするきっかけになることが分かったので、以降、おみくじの内容をより一層工夫するようにした。

【実践② 惟然市と関のあいせきでの展示】

今年の7月12日に行われた『惟然市』には100体以上の作品を展示した。商店会長さんに話を聴くと、『惟然市』の主人公である関市出身の江戸時代の俳人・広瀬惟念があまり知られておらず、『勿体ない』と感じていることが分かった。そこで、広瀬惟念の俳句をおみくじに仕立て封入し、「関市の木」である「スギ」を使い、長良川の雫をイメージした「せきのこけし」を作成し、『関のあいせき』に展示頒布した。



風流せきのこけし展・会場写真

(結果と考察)

『惟然市』は20名程度、「あいせき」の来場者は50名余だった。おみくじは100体以上来場者の手に渡り、「広瀬惟念」や「株杉」などへの興味関心が高まったという感想を多くもらった。

そこで、もっと広瀬惟念さんを知ってほしいと考え、関市美術展に広瀬惟念の『風羅念仏』をイメージした「回るせきのこけし」という作品を出品した。



「回るせきのこけし」(左)と展示した惟然俳句
(結果と考察)

審査員からは「広瀬惟然を市民に再発見させるような楽しい作品」と評価していただいた。また、地域の方々の声を直に聴くことができ、地域との関りを生む公募展の意義に気付いた。

【実践③ 羽島市での聴き取り】

次の羽島市を選んだ。2024 年 10 月から習っている円空彫り教室のあるのが羽島市だったからだ。そこでの関りを改めて確かめるために、改めて先生方への聴き取りを行った。先生方は、

「円空さんの木彫りは『薬』地域の人々に施したものだと思う。そんな営為を地域に知って欲しい。」

「だが円空彫りが月並み化しているのが勿体ない。」とお話してくれた。そこで、これまで教えていただいた円空彫りの技法を生かし、演習林の端材や美濃市蔵生でもらった楮を活用した作品を仕上げ出品した。



湧出千手はしまかふし木のこけし

(結果と考察)

美術展の会期である 12 月 6 日～21 日には、会場の不二文化センターに 800 名弱の観覧者があった。羽島市の木である「貝塚伊吹」や楮など様々な材を活用した作品への関心の高まりがうかがえる感想を多くもらい、創作活動に有用性があることが分かった。しかし、羽島市の美術展では作品を触ることを不可としており、出品者が居合わせた時しか話が聴けず、感想等が限定的になった。また、審査委員長の先生からは「作品に添えた説明板が要らない」との助言と、「あの生えていた木は何か？」との質問を受け、作品の解説を読んでいることに強い衝撃を受けた。

やはり、より多くのお客さんに木工作品を介しながら直接話を聴くという取組の再検証が必要ということが分かった。

【実践④ 岐阜駅・アクティブGでの森のクリスマスマーケットでの展示】

今年 12 月 6～7 日に開催されたマルシェイベント、「森のクリスマスマーケット」で、およそ 100 体、サンタクロースをイメージしたこけしを、演習林のヒノキの端材や身近な小径木等に着色して制作し、展示した。不特定多数のお客さんに興味をもってもらうとの意図で、おみくじの内容は「クリスマスソング」に関するものとした。



サンタこけしとクリスマスソングみくじ

(結果と考察)

100 名以上のお客さんとのやり取りの中で、様々な樹種の木工作品を手にとってもらい会話を交わすことで木々への関心が高まることがわかった。また、偶然引いたおみくじから受け手が思い出を語り出し、作り手・受け手双方に深い感動をもたらすことが分かった。

5 まとめと今後の展望

木工作品を介させコミュニケーションを図りながら創作する「聴き削り」の取組は、地域との関わりを結ぶ際に少なからず有効であることが明らかになった。

在学中に参加させてもらったマルシェや地域の催しなどを振り返って分かったのは、

- (1) 各地域には、その地域をより良くしたいと考え、努力し続けている方々があり、話を聴きに行くと、様々なことが学べるという当たり前だけど大切なこと。
- (2) その際は、ただ「話を聞く」のではなく、その地域の文化・資源をしっかりと学び、どのように生かせば地域の方々に喜んでもらえるかを考え、リスペクトして木工作品として、形にすること。
- (3) 多くのお客さんに作品を手にとってもらうために、「おみくじ」は有効で、引いていただけるとお客さんと作者の間に心の通い合いが起こる、ということ。
- (4) 木工作品を介した対話は、お客さんの心を動かし、その場に立ち会うことは、作り手の喜びにもなる、ということ。

これまでの実践を通し、以上 4 点のことが、多くの地域にお世話になった経験から分かった。地域の方々にお話を聴きに行き、相手に喜んでもらえるような木工創作を模索し、地域との縁を起こすような取組を、今後も続けたいと考える。

